観月祭

観月祭は秋、通常は9月中旬から下旬に満月の下で行われる。輝く月のほかに、祭りの中心となるものに詩歌がある。この祭りは、日本の伝統的な詩歌である短歌や俳句で祝う。

短歌は、五・七・五・七・七のパターンで構成されており、行数と音数が決まっている詩歌である。（俳句では、最後の2行を省く）。観月祭では、住吉大社の有名なアーチ橋である反橋の上から僧侶たちが選りすぐりの詩を朗読する。アマチュアの詩人たちは作品を応募できる。この朗読会の後には、伝統的な踊りが披露される。

住吉大社と詩の関わりは1,000年以上前にさかのぼる。現存する日本最古の歌集万葉集など、8世紀から9世紀にかけての詩歌には、この神社とその沿岸の様子が記されている。祭神は守護神や女神とされている。一説によれば、和歌の名人・藤原定家(1162年-1241年)が神社で一夜を過ごしたとき、老翁の姿で神々が夢に現れたという。そのときの「月は明るい」という彼らの言葉は、彼の日記である「明月記」のタイトルの由来となった。